

木村定三コレクションの武器形青銅器より



《細形銅剣》 弥生時代 M290



《広形銅矛》弥生時代後期（1-3世紀） M291



《中広形銅矛》弥生時代 M292

木村定三コレクションの武器形青銅器

愛媛大学ミュージアム 吉田 広

はじめに

美術品を中心とした膨大な木村定三コレクションには考古資料も少なからず含まれ、銅鏡を契機に昭和20年代末から40年代初頭に蒐集の図られたことが、特別寄託された木村氏の手帳等一式の概要報告で述べられている（足立・長屋2018）。考古資料のうち、銅鏡については目録が早くに刊行され（久保・森下2012）、特徴的な資料についても報告がなされている（岩本2012）。その後、陶磁器・金属工芸品の目録刊行も進む中、2024年度末に考古資料についても地域別に目録が刊行された（吉田他2025、中野2025、杓谷2025、山本・大西2025）。吉田も同目録において、日本出土とみられる弥生時代武器形青銅器を担当したが、限られた紙幅で詳細報告に及ばず、またその後の検討で若干の修正を要する点も明らかとなったため、実測図作成を踏まえ木村定三コレクション中の武器形青銅器3点の詳細を以下改めて報告する。なお、同じ弥生青銅器である銅鐸についても木村定三コレクションに1点存在し、花入に再加工されているため「茶道具－金属工芸」の範疇でまず紹介され（長屋・村瀬編2014）、その後銅鐸としての詳細も含めた報告が行われている（古田2023）。

1. 銅剣 [M290] (図1)

大きな欠失部も含め全体に端部欠損が及び、砂泥付着や斑状の錆があり、器表面の状況は良くない。現存長31.8cmうち剣身長29.3cmで、本来は剣身長29.5cm前後と推測され、茎は下端面が丁寧に磨かれ（図1右下）、長さ2.5cmを測る。刃部と脊上を同時に研ぎ出し、刃部中位やや下方に、刃端部は突起・脊上は節帯を介して、外形が内湾に転じた刳方部をもち、さらに段差を残しつつ下端関部まで刃部と脊上の研ぎ出しが達しており、細形Ⅱ式b類に分類される銅剣である¹⁾。身幅は突起部で復元3.6cm、刳方下端で最大3.7cmを測り、脊は幅0.8～1.5cm・厚さ0.7～1.2cm弱で鋒から茎へと推移し、幅・厚みがしっかりしている。端部をほとんど欠損するものの、刃部の研ぎ出しも鋭かったようで、武器としての使用に耐える形状を備えた銅剣である。ただし、刃部研磨を及ぼさない翼表面には鑄らしに近い状態が残る。なお、刃部中位片側の比較的大きな欠損部は、残存する破断面にも現状器表面と同じ錆の状態と砂泥付着が認められ（図1左下）、銅剣埋没時には既に破断していたことが窺える。

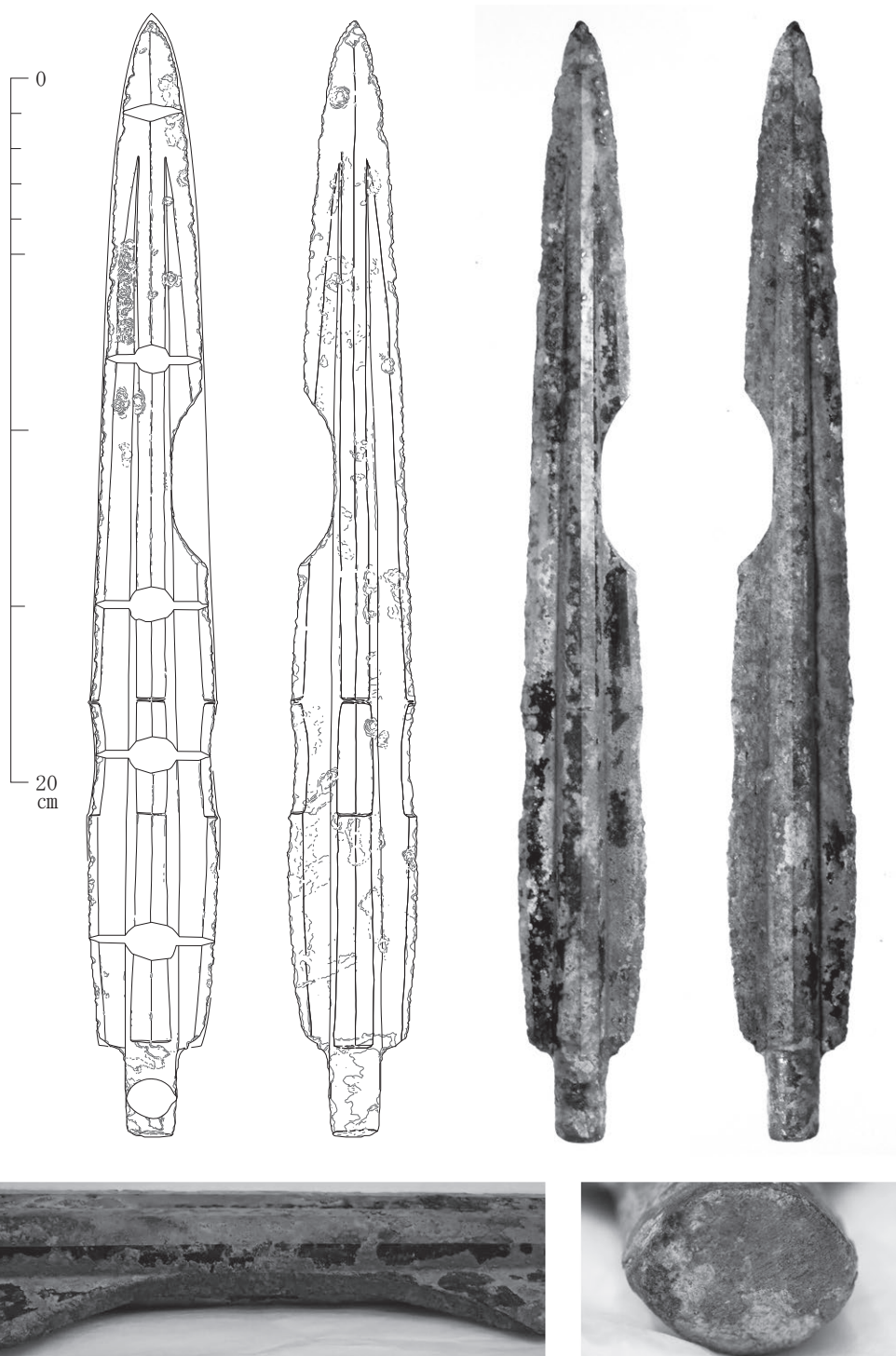


图1 铜剑 [M290]

本銅剣を収納する箱には、「石之神々社出土」との箱書が伴い、奈良県石上神宮出土であることを示唆するものの、その可能性は低い。なぜなら、関門海峡を越えた中四国地方以東での完形細形銅剣の確実な出土は南あわじ市古津路14号銅剣(吉田2021)までであり、かつ例外1例を除いて、中四国地方以東出土細形銅剣には下端近くの翼両側に関部双孔を伴うからに他ならない(吉田2012)。出雲大社出土を語る近世以降の贋作銅矛の存在があるように(吉田2001)、古物価値称揚を目的に由緒ある神社名が後付けされたと考えるべきだろう²⁾。銅剣自体の形状と現状の表面状態から、甕棺ないし木棺墓といった墳墓への副葬例である可能性が高く見積もられ、峻別がなお容易でなく朝鮮半島出土の可能性も残しつつ、福岡・佐賀周辺北部九州の弥生遺跡から掘り出された銅剣である可能性を大きく見積もっておきたい。

2. 銅矛 [M291] (図2・3)

片側端部に欠損が少しあるものの全形がよく残る。全長85.0cm・鋒最大幅12.8cm・刃部最小幅9.3cm・関部幅復元13.5cmを測り、鋒部での刃幅増が著しい。鋒部中央には研磨による稜線でなく鑄型に溝状に彫り込まれたことによる突線が見られ、先端は刃端部に一部回り込むように連続するらしい。刃部は端部が丸みを残し厚みも0.2~0.3cmあり、刃は研ぎ出されていない。鎬も鑄出しで、そこから一段低く横断面凹状の樋底をなして、あまり厚くはない横断面杏仁形の脊が立ち上がる。刃部鑄出し鎬は樋先端から関部に達するが、下端で鈍角ながら明確な角を有して屈折し、樋との段差をそのまま有して端部に到る(図3左上)。なお、片側(耳のない側)の鑄出し鎬下端屈曲部には抉れたような鎬の蛇行があり、鑄型彫刻時のミスを反映した可能性が高い。他方、樋先端以下の脊上に鑄出し鎬が見られず、上記したような丸みのある杏仁形の横断面形となる。関部の翼は厚さ0.2cm前後ながら脊際が薄く端部で厚みを増す。その翼部から連続して、袋部両側には幅0.7~0.9cmの鰭部が下端にまで及んでいる。袋部下端は大きく裾広がりとなるが、節帯の段差あるいはその痕跡化した刻線はもはや見られない。片側に扁平板状の耳が付き、実測図面では三重の、裏面では二重のC字状突線が鑄出されている(図3左下・右下)。袋部下端面では、内型周辺と鑄型表裏合わせ部が一段高く鑄出された格好となる(図3右上)。袋部内側は下端から6cm前後より上に内型をそのまま残し着柄の用をなさない。

以上の特徴から、本銅矛は福岡県春日市域を中心とした北部九州で弥生時代後期に製作された、銅矛最終末型式にあたる広形Ⅱ式銅矛である。

欠損状況として、鋒部片側(耳のある側)の刃部には長さ2cmほどの欠損部があるが、これは実測面側からの打撃によるもので、掘り出された際の傷である可能性が高い。ただし、この傷のある側のそれ以外の端部は総じて残存が良好で、反対側は袋部下端まで一貫して細かな欠損が及んでいる。埋没時すなわち埋納時に、この細かな欠損の全域に及ぶ側が上位に位置していた可能性が高いと言えるだろうか。ただ反対側にむしろ一撃のみながら掘り出し時の明確な打撃痕があることも確かである。いずれにせよ、両側で大きく埋没

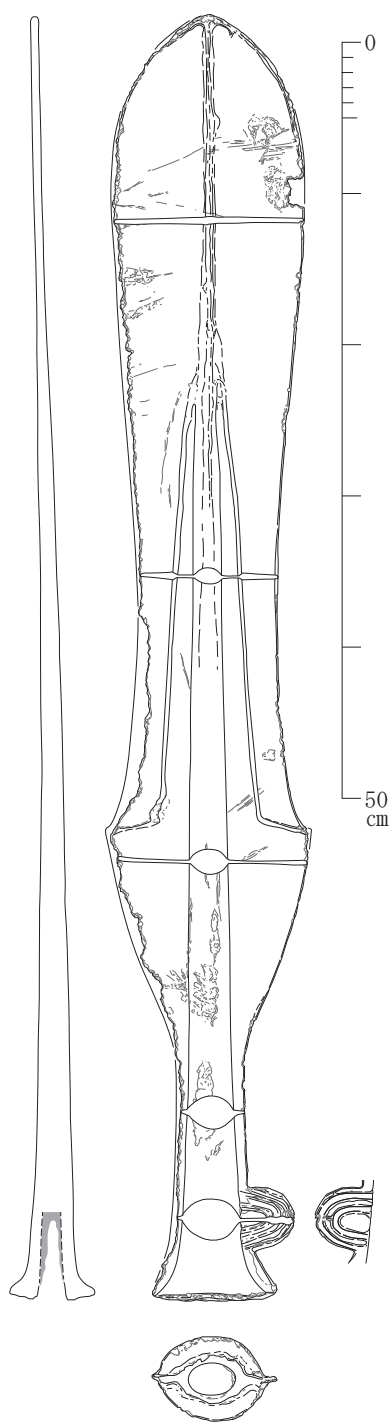


图2 铜矛 [M291] 全形



図3 銅矛 [M291] 各部詳細

環境が異なっていたことは明白で、上下がどちらになるかの判断は措くとしても、刃を立てた状態での埋納埋没は間違いない。

収納箱内に「銅鉾／筑前國筑紫郡春日村」と墨書された紙片があり、当時春日村の現春日市内では広形銅矛鑄型出土は多数に及ぶものの、確実な製品出土は須玖岡本ノ辻の9本の記録があるのみで、同9本はすべて現在行方不明となっている。表裏上下で器表面の状況が異なり複数埋納例の1本であることを推察させる本例が、目録（吉田他2025）でも指摘していたように、須玖岡本ノ辻出土銅矛の1本であるかどうか、改めて詳細を検討しておきたい。

1922年2月出土の須玖岡本ノ辻銅矛は、中山平次郎により、「地面下一尺五六寸の邊に、九口の銅鉾が鋒端と柄端とを互違に、刃を上下にして密に重つた儘埋没して居たといふ。」と出土状況が報じられるとともに、9本中の3本の拓本（図4左）と9本の寸法詳細が示され³⁾、さらにそのうちの5本に連結式鑄型の鑄型接合部の痕跡が見られることまで言及されており（中山1922）、連結式鑄型の製品における言及例として貴重な報告となっている（片岡1993）。また後に、福岡県の名勝天然記念物調査報告において、9本中の7本の集合写真（図4右）が掲載されている（島田編1925）。先の拓本とこの写真を見比べてみると、拓本右と写真最も右のものが、表裏となっているものの欠損状況から同一銅矛であることが明らかである。拓本が示された中央と左の銅矛を写真中の残る6本に見出すことはでき

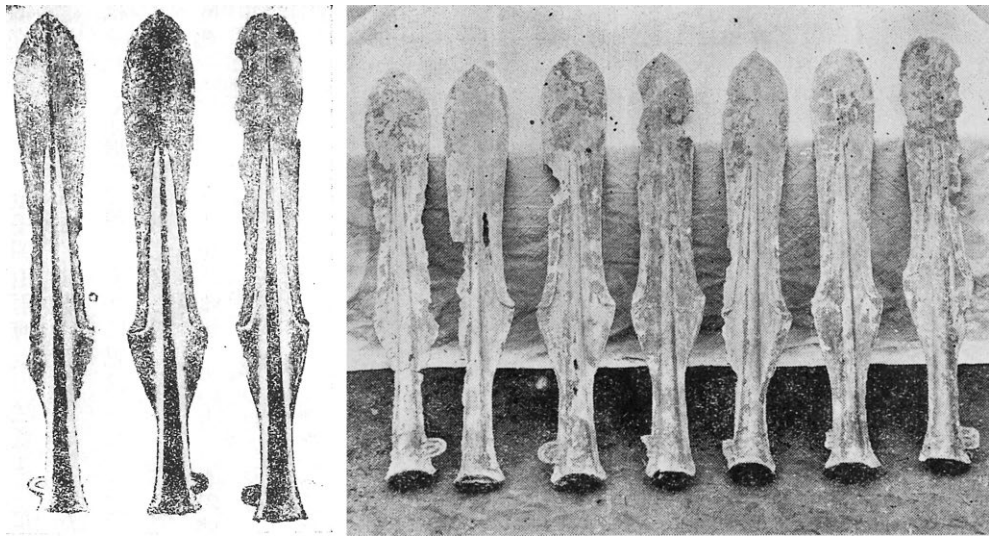


図4 須玖岡本ノ辻出土銅矛

ないことから、拓本と写真に共通する1本、拓本のみの2本、そして写真のみの6本と、9本すべてが報告されていることになる⁴⁾。そして、そのいずれの形状も、木村定三コレクションの広形銅矛とは異なることを確認できる。

したがって、本例は須玖岡本ノ辻出土銅矛ではないと断定でき、先に目録（吉田他2025）で指摘していた可能性は否定されなければならない。そして、「銅鉾／筑前國筑紫郡春日村」の記述が正しいとなれば、これまで出土記録のない銅矛ということになる。ただし、そのメモ書きの正確性を担保できる根拠はなく、出土情報としては「伝春日市内」との記載に止めておくのが、現状では適当と判断する。

3. 銅矛 [M292] (図5)

袋部から関部への転換部で接合復元され、刃部は本来の外形をほぼ残しつつも、全域で端部を細かく欠損する。現存長80.0cm、本来は全長80.3cmに復元される。現状で鋒最大幅6.5cm・刃部最小幅5.5cm・関部幅8.1cmを測り、身上半刃部は中位で若干細く鋒でやや膨らむ程度。基本的に鋳出し鑄であるが、端部こそ丸みを残すままらしいものの刃部表面は鋳造後の研磨が丁寧に及び平滑に磨き上げられ、樋先端は鋭角的にシャープに仕上がっている（図5右列1段目）。対して刃部内側は横断面匙面状の樋を形成し、鋳造後のまま鋳放しの凹凸が残り、そこからやや厚みのある横断面杏仁形の脊が立ち上がり、刃部研磨の延長がこの脊上にも及び、同様に平滑な面を作り出している。この鋳出し鑄が末端関部では明瞭な角を有して屈折し、鋳出し鑄の隆起を減じて刃端部に収束する。そして、刃部延長上の脊上も、直線的な段差をもって研ぎ出し面の末端となっている（図5右列2段目）。関部の翼は厚さ0.2cm前後ながら脊際が薄く端部で厚みを増し、その翼部から連なるように、

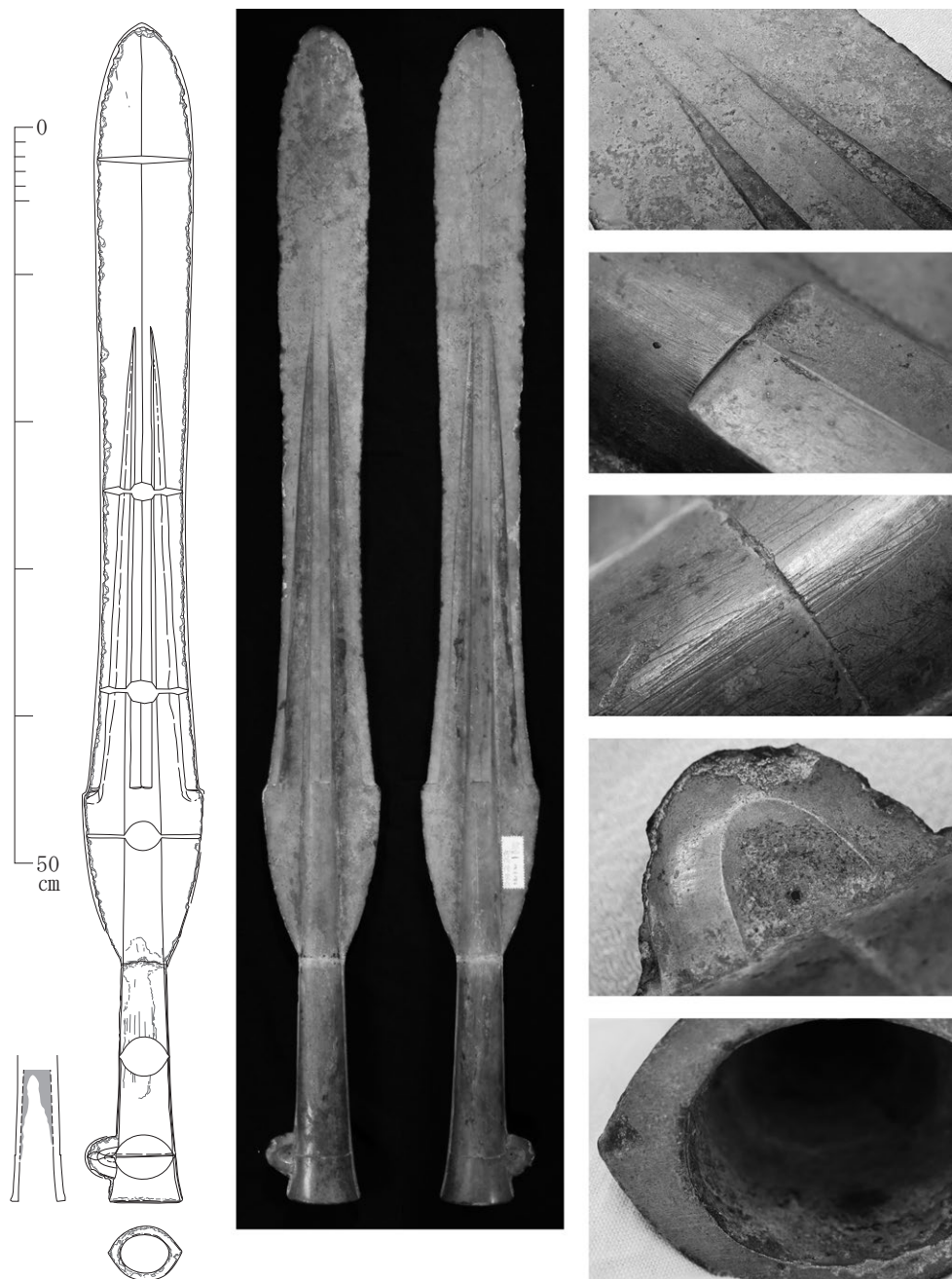


图5 铜矛 (M292)

袋部両側には幅0.2cm前後の鱗状部が袋部下端に達している。袋部は仕上げ研磨がなされているもの、度々他例に見られる金属器使用を推察させる面取り状の磨き仕上げは見られず、銅矛主軸方向の鑄造直後の粗い研磨によるとみられる溝状の擦過痕の残存が目立つ。その袋部下端は、後述する耳の最薄部に対応する位置に鑄造後の刻線と上位側をわずかながら研削して段状部とし（図5右列3段目）、長さ3.2cmの節帯となる。節帯の片側には、鱗状部から連続する板状部から、外斜面はやや膨らみをもち逆に内斜面はやや匙面状の横断面菱形状を呈し、中心部は0.1cm程度の厚さでわずかに径0.1cm程度の孔が開く耳が付く。内斜面部分と開孔は鑄造後の仕上げによる造作であろう（図5右列4段目）。袋部下端面は丁寧な研磨がなされ、左右幅5.0cm・厚さ3.7cmを測り、全体に0.5cm前後の器壁厚となり、下端面で左右幅3.3cm・厚さ2.6cmの中空部が開く。ただし、下端から10cmより上には土製内型が残り、鑄造後に着柄を意図して内型が抜き出された気配がない（図5右列5段目）。

以上の特徴から、本銅矛は春日市域を中心とした北部九州で弥生時代中期末葉に製作された中広形銅矛である。その中でも、鋒幅の拡張が顕著でなく全体に細身で、また研ぎ分けは認められず袋部の磨き仕上げも顕著でないことから、やや古相を呈する個体に位置づけられようか。

銅矛本体および収納の箱に、旧所蔵者の可能性も考慮される個人名の表記されたラベルが付されている。その個人名の探索を試みたものの、銅矛出土に関わる情報とは結びつかず、附帯情報から出土地の探索が叶わない。上述してきた型式および欠損状況から、北部九州を中心とした中四国地方西半以西のいずれかの地域から出土した埋納例とまでの推測に止めざるを得ない。

おわりに

以上、膨大な木村定三コレクション中の考古資料の武器形青銅器3点について詳細を報告してきた。考古資料としての意義・特徴については明らかにできたのではないと思う。一方で、蒐集コレクション資料として、その出土来歴について探索を試みたものの、明らかにできたことは、ある意味ほとんどなかった。繰り返せば、出土考古資料の通有理解に沿って、3本いずれもが北部九州を中心とした西日本西部出土の可能性が高いことで、辛うじて広形銅矛〔M291〕に福岡県春日市内出土の可能性が残った程度である。

このような状況は、明治以前に遡るような古い出土ながら記録に残ることで存在が比較的知られた事例に該当せず、明確な出土地が学界に広く共有されたことのない資料であったことが示唆される。出土文化財に関する法整備が進み、戦後昭和25（1950）年に文化財保護法が制定されて以降にあっては、新出土品の個人蒐集が難しいことを勘案すれば、昭和20年代末から昭和40年代初頭の蒐集という、コレクションとしては比較的若い時期の形成故に、そのような出土資料がもたらされたと考えられようか。

【注】

- 1) 銅剣・銅矛の分類については、吉田（2011）に拠るが、細形銅剣と中細形銅剣の区分については、吉田（2019・2025）で更新した内容に基づく。
- 2) 木村定三コレクション中に、「石上神宮傳來上代鐵鉾」のラベルが付された箱に収納された鉄製品があり、箱の仕様が銅剣〔M290〕に共通している。石上神宮に仮託されたセットが作為的に形作られ、それが木村定三氏のコレクションにもたらされた可能性が考えられる。
- 3) 銅矛の埋納状態について、出土した銅矛を用いて復元的に配置した写真が、京都大学による須玖遺跡調査の報告（島田1930）に掲載されている。
- 4) 銅矛7本の写真について、「外一口は帝室博物館に一口は折損せるによりて省けり」との注釈が付され（島田編1925）、拓本では完形であったものが「折損」となっており齟齬が生じてしまう。しかし、拓本から写真に写る欠損箇所のある銅矛への変化を他の銅矛において肯定できる状況はなく、採拓後に折損を生じた銅矛が写真からは省かれたところでは判断しておく。なお、それらの所蔵保管について、島田（1930）では、「一口東京帝室博物館蔵、七口磯野七平氏蔵、一口（残欠）高田半太郎氏蔵」と明記されており、出土地所有者・発見者である高田氏の手元に残った一口が敢えて残欠と付記されていることから、島田編（1925）で掲載された写真の銅矛7本は、磯野七平氏蔵となったものであった可能性が高いと推測する。

【参考文献】

- 足立好弘・長屋菜津子2018「特別寄託『木村定三氏手帳等の資料』について」『愛知県美術館研究紀要』第24号 木村定三コレクション編
- 岩本崇2012「木村定三コレクション大阪府枚方市万年寺山古墳出土三角縁神獸鏡」『愛知県美術館木村定三コレクション研究紀要』第18号
- 片岡宏二1993「広形銅矛に残る鋳型の継ぎ目痕跡に関する研究」『九州考古学』第68号
- 久保智康・森下章司2012「木村定三コレクション銅鏡目録」『愛知県美術館木村定三コレクション研究紀要』第18号
- 島田貞彦1930『筑前須玖史前遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第11冊、臨川書店
- 島田寅次郎編1925『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第1輯、福岡県
- 杓谷茂樹2025「木村定三コレクション中南米考古目録」『愛知県美術館研究紀要』第31号 木村定三コレクション編
- 中野智章2025「木村定三コレクション中東考古目録」『愛知県美術館研究紀要』第31号 木村定三コレクション編
- 長屋菜津子・村瀬可奈編2014『茶道具－金属工芸、竹工芸を中心に 木村定三コレクション』、愛知県美術館

中山平次郎1922「須玖新発見の広鋒銅鉾『明治三十二年に於ける須玖岡本発掘物の出土状態』続編」『考古学雑誌』第12巻第12号

古田浩俊2023「M1130《銅鐸花入》—銅鐸としての視点から」『愛知県美術館研究紀要』第29号 木村定三コレクション編

山本堯・大西遼2025「木村定三コレクション中国・朝鮮考古目録」『愛知県美術館研究紀要』第31号 木村定三コレクション編

吉田広2001「異形銅鉾について」『辰馬考古資料館考古学研究紀要』第4号

吉田広2011「武器形祭器」『講座日本の考古学 第6巻 弥生時代（下）』、青木書店

吉田広2012「小倉城二の丸家老屋敷遺跡出土の銅剣」『小倉城二の丸家老屋敷遺跡』、北九州市教育委員会

吉田広2019「武器形青銅器の東進」『淡路島・松帆銅鐸と弥生社会（季刊考古学・別冊28）』、雄山閣

吉田広2021「淡路島南部の青銅器」『松帆銅鐸調査報告書Ⅱ－調査研究編－』、南あわじ市教育委員会

吉田広2025「武器形等の青銅器からみた淡路島」『松帆銅鐸調査報告書Ⅲ－研究編－』、南あわじ市教育委員会

吉田広・原田幹・原田昌浩・大西遼2025「木村定三コレクション日本考古目録」『愛知県美術館研究紀要』第31号 木村定三コレクション編

【挿図出典】

図1・図2・図5実測図：吉田作製

図1・図2・図5全形写真：愛知県美術館提供

図1・図2・図3・図5部分写真：吉田撮影

図4左拓本：中山（1922）4頁第六図

図4右写真：島田編（1925）11頁写真（須玖岡本の辻より出たる銅鉾）

愛知県美術館研究紀要 第32号 木村定三コレクション編

2026年3月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

Tel: 052-971-5511 (代)

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>


aichiprefmuseu of art

制 作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.32

Part2 Studies of The Kimura Teizo collection

2026

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art

1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 Japan

Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.

© 2026 Aichi Prefectural Museum of Art, All Rights Reserved.